



巻 頭 言

善 玉 ・ 悪 玉

財団法人日本植物調節剤研究協会 理事
生物系特定産業技術研究推進機構 P L

村井敏信

テレビの人気番組に、「水戸黄門」がある。最初に放映されたのが1969年というから、途中休むことがあってもおよそ30年間に渡って続いたことになる。ストーリーとしては単純で、必ず悪玉役と善玉役が存在し、最初は善玉が悪玉にいじめられる。そこへ、水戸黄門の一行が登場し、善玉を助けて悪玉を懲らしめ、最後には印籠を出して、「この紋所が目に入らぬか」と悪玉を恐れ入らせてめでたく決着するというワンパターンストーリーである。

劇ドラマの作品としては、日本人の「勧善懲悪」の好みに適合し、私自身も別に嫌いな番組ではないので、何もとりたてて文句を付ける気はない。しかし、現実の世界でも、このように短絡的に善玉と悪玉をきめつけるやり方が横行しているのは極めて問題である。

かつて、第二次大戦中、しばしば「鬼畜米英」という言葉を耳にした。当時の状況では、軍部の命令でやむを得なかったこととは思いますが、米英悪玉論を喧伝したのはマスコミである。私は当時子供ではあったが、本当に米国人や英国人は「鬼」や「畜生」であると堅く信じていたものである。

最近のマスコミの報道の仕方には、明らかに客観性を欠いた偏った報道姿勢が見える。特に、テレビのワイドショーなどでのニュースの取り扱いにはこの傾向が強い。何かことがあると善悪を決めつけ、一方的に追求するというやり方である。

我が国は、国土が狭く、しかも資源に乏しい国である。科学技術の発展がなければ、国の将

来もない。しかるに、科学技術に対するマスコミの論調は、単純な善玉・悪玉論が多い。例えば、原子力発電である。確かに東海村におけるような事故は許されないことである。しかし、だからといって原子力発電全体を悪玉に仕立てて、非難することはいかなるものであろうか。現在、東京電力で供給している電力の46%は原子力発電によるものである。1997年に、京都で開かれた気候変動枠組条約第三回締約国会議における取り決めで、日本は2010年（2008年から2012年の5年間の平均）のCO₂等温室効果ガスの排出水準を、1990年に比べ6%削減しなければならない。電力消費は年々増加しており、現在の日本の経済活動と生活水準を維持しながらこの目標の削減率を達成するのは至難の業といわれる。原子力発電をやめたら、どのようにしてこの削減目標を達成しようとするのであろうか。背景と必要性に対する十分な情報を報道しないで原子力発電所の建設は「是か非か」といった問題提起をすることは正しいやり方であろうか。

科学技術には完全ということではなく、必ずプラス面とマイナス面を持つものである。したがって、科学技術の再評価には、このプラス面とマイナス面を合わせて評価することが必要である。どんなに優れた科学技術でもそのマイナス面のみを取り上げて強調すれば、完全な悪玉になってしまう。これでは、科学技術の進歩は見込めない。少なくとも科学技術については、マスコミに「水戸黄門」になってもらいたくない。